

がん社会 を診る

中川 恵一

毎年10月は乳がんの早期発見・早期治療の大切さを伝えるピンクリボン月間で、全国各地で啓発イベントが開催されました。乳がんは日本女性の11人に1人がかかるといわれており、女性にとっては身近な病気です。早期に治療すれば、9割以上が治癒する治りやすいがんでもあります。

乳がん検診の大切さを啓発することも目的に、女性の健康情報サービス「ルナルナ」が意識調査「経験者の声から知る乳がん」を行い、私も分析に加わりました。乳がんが見つかったきっかけを尋ねると「セルフチェックで違和感を覚えて自ら行った検診」が46・0%と半数近くに上っていました。

乳がんは罹患（りかん）したことのない女性の8割近くは「セルフチェックで見つけることもできる病気」と自己触診の有効性を認知していま

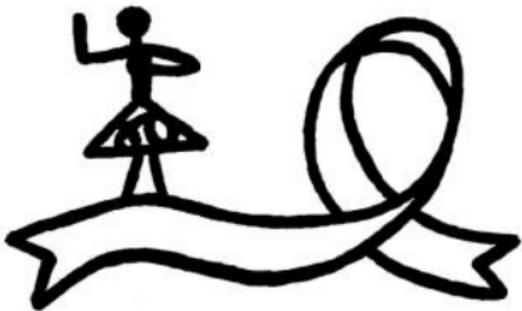
乳がん検診、低い日本の受診率

した。それにもかかわらず、実際に定期的に行っている人は1割に満たず、半数以上の人は一度も行ったことがないという衝撃的な結果でした。身近に乳がん患者がいるかどうかによって、検診の受診率に差が出ました。検診未受診の理由は「行きたいとは思うがなんとなく行きそびれている」が最も多い回答で、病気に対する危機感に違いがあることが分かります。

日本の乳がん検診の受診率は約4割と、欧米諸国や韓国の受診率7〜8割の半分程度にとどまります。ルナルナのアンケートでは、乳がん経験者から「検診は絶対に受けてほしい。早期発見できれば治る確率が高い」「発見は早い方がよい。検診で病気が見つかることは怖いと思いますが一歩踏み出してもらいたい」「なんともないからこそ検診を受けてほしい。誰にでもなる可能性があることを知ってほしい」といったメッセージが多数寄せられました。

少子化も乳がん急増の大きな理由です。妊娠、出産、授乳の2年以上の間は生理が止まり、乳がんのリスクが低下するからです。また遺伝性の乳がんも全体の5〜10%あり、近親者に乳がん患者がいる場合はいない場合に比べて2倍以上リスクが高まります。

まずは自分自身のリスクを知ること。そして、毎月の自己触診と2年に1度のマンモグラフィを欠かさないことが、乳がんで命を落とさない秘訣です。



イラスト・中村 久美